

◎ シリーズ 長岡京歴史散歩

110

刻印された文字と文様

くスタンプのあれこれ

土器や陶磁器、瓦などに記された文字や記号、文様は、墨で書くもの、先端を尖らせたヘラや刀子などでひっかくように書く線刻と、ハンコをつくように押す刻印があります。刻印は、木・石・金属などに文字や記号・文様を彫り込んでおり、個々に同じものを連続して押すことができず、現代では郵便局の消印や印鑑があり、年賀状に押す新年の干支や賀詞のスタンプもこれと同じです。今回は、市内の発掘調査で出土した主な刻印について紹介します。

「乙訓寺」は平瓦の側面に、「奥海寺院儀兵衛」は軒棧瓦の端に押されています。奥海印寺には江戸時代後期に京都の御用瓦師をつとめた瓦職儀兵衛の仕事場がありました。ここで生産された瓦は主に乙訓地域北部に販売されました。刻印の大きさは「乙訓寺」が長さ3.2cm、幅1.3cmで、「奥海寺院儀兵衛」は長さ2.6cm、幅1.3cmです。

菊花文は、菊の花弁を圖案化したもので、火鉢

の外面に横に連ねて押しています。直径3cm。室町時代前期。花菱文は、菱形の中に四枚の花弁を配しています。火鉢外面の二本の凸帯間に押ししており、刻印の継ぎ目にできた筋が明瞭に残ります。一単位の大きさは約1.5cm×2.8cm。室町時代後期。これらは奈良火鉢と呼ばれるもので、全国に広く流通したことがわかっています。

「井」は、井桁の形をした印です。平瓦の端面に押されたもので、大きさは9mm角。長岡京の瓦を生産した奥海印寺の谷田瓦窯の製品です。軒平瓦の中心飾りにも「井」字形が範型に彫り込まれています。

「上長」は、扉をかたどった枠内に彫られた文字です。江戸時代中頃に泉州堺で生産された播磨鉢の片口に押されています。「上長」の刻印は堺焼操業時の製品に使われたものですが、その意味するところは明らかではありません。播磨鉢のブランドとして押された太鼓判かもしれません。



▲「乙訓寺」と「奥海寺院儀兵衛」



▶ 菊花文と花菱文



▶ 「井」と「上長」